

# ベースボール型教材におけるボールを持たないときの動きの習得と変容 —スプリットステップとネオフィルダーベースボールを適用して—

発表者 埴 拓大  
指導教員 大津 展子

キーワード：ボールを持たないときの動き、スプリットステップ、形成的授業評価、教え合い活動、フィードバック

## 1. 緒言

平成 29 年に告示された中学校学習指導要領・保健体育編（文部科学省）では、ボール運動系における技能の観点が「ボール・用具操作」と「ボールを持たないときの動き」に大別されている。球技は、ゴール型、ネット型、ベースボール型から構成され、個人やチームの能力に応じて、作戦や戦術を立て、勝敗を競うことに楽しさや喜びを味合うことのできる運動であると示されている<sup>1)</sup>。宮内（2010）らはベースボール型競技において、「ボールの捕球・送球といった運動技能さながら、ゲーム中に求められる状況の[判断]が複雑すぎる。」ということの問題視している<sup>2)</sup>。また、高橋ら（2010）は、ベースボール型のゲームでは、とくに守備側の状況判断を伴ったボール操作や、ボールを繋いでいく中継、進塁を阻止するベースカバー、仲間のボール操作に対するバックアップといったボールを持たないときの動きが非常に難しいと述べている<sup>2)</sup>。さらに、岸田（2019）は、ベースボール型におけるボールを持たないときの動きとしてスプリットステップを習得することが、打球方向に 1 歩目を踏み出す速さや、打球に対する正面への移動の動きに大きく関与すると述べている<sup>3)</sup>。

そこで、参加者全員が同じ課題に従事でき、ベースボール型の本質的な面白さを味わうことのできるネオフィルダーベースボールを適用し、実証実験を行うこととした。本研究では、ベースボール型の教材において、スプリットステップに着目し、スプリットステップを教授し、習得させることでボールを持たないときの動きがどのように変容するか明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究方法

### 2-1 対象

- ・ I 大学の大学生 10 名（3 年 5 名 4 年 5 名）
- ・ ベースボール型競技経験者 4 名（野球経験 10 年以上の者）
- ・ ベースボール型未競技経験者 6 名（学校体育以外でベースボール型競技の経験がない者）

### 2-2 実験計画

実験計画は表 1 に示した通りである。

表 1

回数	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目
学習内容	オリエンテーション	ティーアップ→前半→作戦会議→後半					
		5分	10分	3分	10分		
しかけ	試しのゲーム	FB（スプリットステップのタイミング、1歩目の切り方） 教え合い活動（チーム内練習、作戦会議）					

### 2-3 データ収集の項目

- (1) 実験中、ホームベース後方から定点ビデオカメラで撮影した映像。
- (2) 毎回 1 人 1 人に形成的授業評価を実施。

### (3) 形成的授業評価を基にしたインタビュー

## 2-4 データ分析

### 2-4-1 スプリットステップの点数化

学習者それぞれ 1 プレーごとにスプリットステップをできている 3 点、どちらともいえない 2 点、できていないを 1 点とし、学習者 10 名の平均点を算出した。

### 2-4-2 形成的授業評価の点数化

形成的授業評価の各項目の質問に対して、「はい」3 点、「どちらでもない」2 点、「いいえ」1 点で得点化し、「成果」、「関心・意欲」、「学び方」、「協力」、「総合評価」の各項目の毎回の平均点と全 7 回の試技の平均点を算出した。

## 3. 結果

### 3-1 学習者全体について

図 1 のように、全 7 回の試技を通して、最低点が 2.6 点（総合評価評定 4）であり、最高点が 2.98 点（総合評価評定 5）であった。

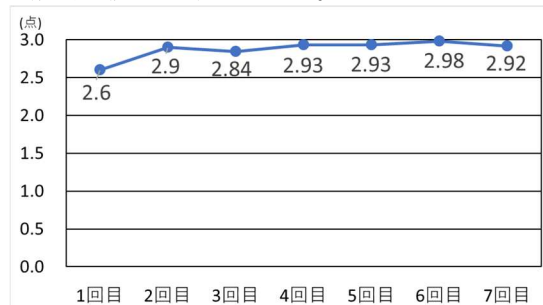


図 1 学習者 10 名の形成的授業評価の総合評価の平均点の推移

図 2 から、学習者全体のスプリットステップの平均点の推移においては、試技 1 回目の 1.58 点から 7 回目の 2.33 点まで右肩上がりであり、試技回数を追うごとに学習者全体の平均点が増加していることが分かる。



図 2 学習者全体のスプリットステップの平均点の推移

### 3-2 学習者 G について

学習者 G はベースボール型競技未経験者のうちの一人である。図 3 から、1 回目から 7 回目にか

けて緩やかに右肩上がりにスプリットステップの平均点が上昇していることが分かる。動画分析の結果から、1回目はスプリットステップをしている姿が見ることができなかった。2回目以降は、スプリットステップをしている姿が見ることができたが、タイミングが合っていないかった。3回目以降、回数を重ねるごとにスプリットステップのタイミングを合い、1歩目を打球方向へ踏み出す姿を見ることができた。

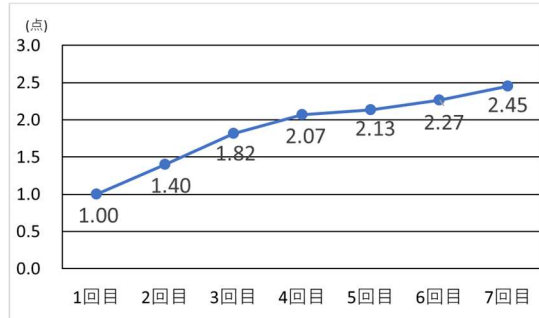


図3 学習者Gのスプリットステップの平均点の推移

### 3-3 学習者Aについて

学習者Aは中学、高校、大学の野球部でピッチャーをやっていたベースボール型競技経験者である。図4から、1回目と7回目を比べてみるとスプリットステップの平均点が上がったのが分かる。動画分析の結果から、1回目ではスプリットステップを行う姿がほとんど見られなかったが、試技の回数を重ねていくにつれて、スプリットステップを行う姿が見えたとともに、スプリットステップを行う回数も増えていった。

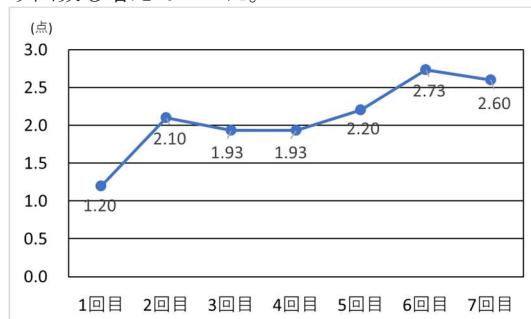


図4 学習者Aのスプリットステップの平均点の推移

## 4 考察

### 4-1 学習者全体について

全7回を通して形成的授業評価の総合評価評定が毎回4か5であり、1試技あたりの総合評価が高く、試技全体が順調に進行し、学習者からの評価が高く、学習者にとっても大きな成果があったと考えられる。また、図2から、学習者全体のスプリットステップの平均点は試技を重ねるごとに右肩上がりに上がっていることが分かる。学習者に対して、毎回、映像によるフィードバックや教え合い活動を取り入れた。スプリットステップを行ってなかった学習者は、試技を重ねるごとにスプリットステップを行う回数が増えた。また、スプリットステップを行っていた学習者は、スプリットステップのタイミングが合うなど動きの変化が見られた。このことにより、試技の回数を重ねることに比例して学習者全体のスプリットステップの平均点

が上がっていったのではないかと考えられる。

### 4-2 学習者Gについて

学習者Gはインタビューの中で、「スプリットステップをすることで1歩目を切りやすく感じた」と発言しており、スプリットステップの習得が打球方向への1歩目を踏み出す速さに繋がったと考えられる。

### 4-3 学習者Aについて

学習者Aは、チーム内での教え合い活動を通して自分自身で意識的にスプリットステップを実践し、自分自身の動きを改善したことがインタビューや動画分析から見られた。このことにより、打球方向に1歩目を踏み出す速さや打球に対して正面への移動の動きに繋がったと考えられる。

## 5 まとめ

全7回の試技を通してスプリットステップの平均点が向上した者、横ばいで変動が小さかった者、スプリットステップの平均点が下がった者が見られた。しかし、学習者たちからは共通してタイミングのことや学習者自身の動きの癖など、教え合い活動や映像によるフィードバックによって、自分自身の動きを理解し、改善に繋がられた。という発言があった。また、毎回、指導者が、見本となる動きや、学習者自身がどのような動きをしているのかなど映像によるフィードバックやそれを基にしたチーム内における教え合い活動を通して、個人差はあったが全体としてスプリットステップの数値が伸びた。このことから、7回の試技を通して、一貫してスプリットステップの指導をフィードバック、チーム内での言葉かけや教え合い活動をしかけとして行った結果、スプリットステップが身に付き、試技の中で、打球方向に1歩目を踏み出す速さや、打球に対する正面への移動の動きといったボールを持たないときの動きに繋がったと考えられる。スプリットステップを身に付けることはボールを持たないときの動きに繋がることから、学校現場においてもスプリットステップの習得について、教える価値があると考えられる。

## 文献

- 1) 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説
- 2) 高橋健夫・岡出美則・友添秀則. 岩田靖(2020) 新版 体育科教育学入門. 大修館書店
- 3) 岸田学志(2019)ベースボール型のボールを持たないときの動きの差ーベースボール型経験者とベースボール型未経験者を対象として
- 4) 大津展子 高校生が夢中で取り組むベースボール型の授業
- 5) 高橋健夫(2013) 体育授業を観察評価するー授業改善のためのオーセンティック・アセスメント
- 6) 岩田靖(2016) ボール運動の教材を創るーゲームの魅力をクローズアップする授業づくり. 大修館書店